とある魔術の禁書目録～幻想殺しと超電磁砲～

桃助さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録～幻想殺しと超電磁砲～

【Ｎコード】

Ｎ４９６５Ｋ

【作者名】

桃助さん

【あらすじ】

幻想殺し（イマジンブレイカー）の上条当麻と、超電磁砲（レールガン）御坂美琴。二人が出会ったのは禁書目録と呼ばれる一人の少女だった。

もし、禁書目録と呼ばれる少女と出会う前にこの二人が既にいい関係になっていたら？のＩＦＳＳです。

プロローグ（前書き）

はじめまして作者の桃助です。小説を作るのは初めてですが精一杯がんばりますのでよろしくお願いします。

プロローグ

「――――ふう、なんとか、まいた、かな？」

ライトアップもされていない無骨な鉄橋の上にいた上条当麻（かみじょうとうま）は、肩を揺らしながら呟くように言った。

七月十九日。

夏休み直前のこの日は、上条にとって厄日以外の何物でもなかった。朝起きれば遅行すれすれの時間だし、それにあたふたして慌てて準備しようとしたら足元にあったキャッシュカードを踏み砕いてしまい、学校に行けばクラスの幼女先生から「上条ちゃーん、今日は補習なのですよー？」と笑顔で宣告されたりしたのであった。

そしてやっと補習が終わって無くなった体力を回復しようと入ったレストランではいかにも不良です、といわんばかりの男たちに絡まれている女の子を見て助けてあげようと女の子を強引に引っ張って助けだし、そこからその不良たちとの追いかけっこが始まったのである。

そして一時間近くも走しってやっと不良たちを撒いたのであった。

これは逃げるだけしかできない上条にとって『勝ちだ』と十分思えることだ。

もともと上条の目的は女の子を逃がす事だったので、その女の子を助ける事ができたのだから何も言うことはあるまい。

汗と涙とその他色々なエネルギーを無くしたが、何も言うことはあるまい。

「街の中を走り回ってると思ったら一体なにやってんのよ、アンタは」

ギクッと上条の体が動いた。
背中から唐突に女の子の呆れたような声が聞こえたからである。逃げ切れたことで安堵してしまって全く気付かなかった。
ゆっくりと上条が背中のほうに顔を向けると、そこには中学生ぐらいの女の子がいた。

そして上条はその『見慣れた』姿を見て、ため息を吐いた。

「不良たちが追ってこなくなったのは、つまりそういうことですか……」
「たくっ……なんでアンタって奴はすぐに面倒事に巻き込まれるのよ」
「……それに関しては上条さんが聞きたい方なんですけど」

生まれた時からずっと不幸だった上条にとって、それはごく当然のような答えであった。
その上条の発言に、少女、御坂美琴（みさかみこと）は、腰に手を当てて上条を睨んでいた。

「いっつもいっつも不幸不幸言ってるけど、アンタの不幸って大半が自分で招いてる気がするんだけど？」
「だからそれが不幸なんですってば御坂さん……」
「そうかしら？『あの時』だって、別に私は助け求めてないのにアンタは勝手に突っ込んできたじゃない」

「うう……」
「はぁー、まあいいわ。んで？結局今日はなにやらかしたのよ？」
そうため息交じりに言う美琴に対して上条は、ライトアップされていないおかげで見える夜空の星を見上げながら、呟いた。
自分の不幸を心底嘆くように。

「ほんと、ついてねーよな、俺って」

プロローグ（後書き）

これからよろしくお願いします。

禁書目録編・第一話（前書き）

頑張ります。

禁書目録編・第一話

「うぅぅー、暑い…」

うだるような熱気に上条当麻は目を覚ました。
夜中にかけていたクーラーがどうやらその役目を終えて電源を切ったらしい。部屋は夏特有の暑さに包まれていた。
汗で背中が気持ち悪く感じる。

着替えないと、と思った上条だがそばに置いてあった携帯がピコピコと自己主張しているのに気付いた。どうやらメールが来ているみたいだった。
しかし上条には送ってきたのが誰かすでに分かっているので、とくに慌てることも無く携帯を取って操作した。

『えと、今日暇？その、暇だったらどっか行かない？』

とのお誘いのメール。
もちろん相手は、御坂美琴だ。

彼女との出会いは、上条が高校に入学した四月にまでさかのぼる。
ようやく新しい生活に慣れて、今日は気分的に外食だー！と立ち入った飲食街で不良に絡まれていた彼女がいたのだ。気分がよかったので助けようと間に入ったが、彼女御坂美琴はここ学園都市のレベル５の超能力者だったのだ。
彼女の攻撃で不良たちは地面に伏せてしまい、上条が助けに行った意味は全く無かった。そして何故か上条まで彼女に攻撃されたのだ（これはいまだに意味が分からない）。

しかし上条には『ある能力』があったので全く効かなかったのだ。
全員を気絶させようとしていた美琴にとってこれは予想もしないイレギュラーだった。

上条はある能力こそ持っているが、それはここ学園都市が開発している『超能力』とは全く関係がないので、上条は学園都市では落ちこぼれの称号レベル０の無能力者だったのだ。
そんなレベル０にレベル５の攻撃が効かない、となったので躍起になった美琴は上条に出会うたびに勝負を仕掛けた。
しかしいくら勝負をしても美琴が勝つことは無かった。それ以前に勝負にすらならなかった。
上条は守りにはいるだけで攻撃をしようとはしないからだ。
勝ったこともないし、負けたこともないのだ。

それが悔しくて美琴は上条を追っかけまわしていたが、そんな二人の関係が変わってしまうような事件が起きた。

それはとある実験に彼女が巻き込まれていて、それを『偶然』知った上条が助けに行った、といったものだった。
その事件以来、毎度毎度勝負言っていた美琴が手のひらを返したように大人しくなったのだ。
いや以前より大胆になった。

そう、このメールのように。

携帯の番号とアドレスを美琴に教えたのが、朝起きてから夜寝る瞬間まで上条のメールや電話の履歴は美琴でいっぱいだった。
なんだかなーと思っていた上条は以前美琴そのことを言ったのだが、

『べ、別になにもないんだからねッ！？そ、そうよッ！わたしって

お嬢様学校に行ってるから男とあんまり接する機会ないからやっぱりお嬢様といっても女の子なわけだし世間にでてもはずかしくないように男と接する練習しててもいいんじゃないとわたしは思うわけでつまり何が言いたいかと言うと黙ってメールと電話しろやゴラァ！！！』

などと言われてしまったのでそれ以来あんまり気にしないようにしている。
いやだって怖いんだもん。

「えーと、今日はなんかあったっけ？」

そういって美琴に返信しようと今日の予定を思い出していた上条だが、いきなり携帯がブルブルと動いて文章画面から電話画面にと切り替わった。
まーた美琴か、とゲンナリした上条だが、

（ありゃ？小萌先生？）

画面に出てきた相手は、美琴ではなく上条のクラスの担任の月詠小萌だった。

（なんだろ、なにか不幸な事がおきそうな気がするんですが……）

そう思った上条だが、さすがに先生からの電話を無視するわけにもいかず、渋々ボタンを押した。
そして電話からは小学生としか思えないような幼い声が聞こえてきた。

『はーい、そちらは上条ちゃんでよろしかったですかー？』
「小萌先生、これは俺の携帯なんですけど」
『あ、しっかり上条ちゃんですねー』
「どうしたんですかこんな時間に？」
『あ、そうでしたー。上条ちゃん、これから補習授業なのですよー』
「はえ？」
『昨日言い忘れてたのです。上条ちゃん、今から学校に来るのですよー』
「ええ！？ちょ、まっ――――」
『じゃあ待ってますよ上条ちゃんー♪』

ブチッっと切られた電話を数秒間見つめ、上条は盛大にため息をついた。
不幸だ、と。

そして憂鬱になった上条はふと思い出した。
（ああそういえば御坂にメールしねぇと……。いやもうなんて返ってくるか分かってるんですけどね…）

ああもう不幸すぎますーっ！と部屋で叫んでだ上条はどうにかしてこのネガティブ思考を無くすため、なにかしようと考えた。
そこで考えたのは布団を干す事だった。
上条の汗でまだ若干湿っているので干さないと今日寝るときに嫌な思いをしそうだ。

「さーて、布団をまとめてーっと」

すこしでもネガティブ思考を無くすため無理やり明るい声を出しながらベランダに続く網戸を開けた上条。

しかしその動作が止まった。

ベランダにはもう布団が干してあった。

いや良く見るとそれは人間だった。

白いシスター服の、女の子だった。

あれー？ここ七階だよなー……、とそこまで考えて上条は、

「っておい！？なんでこんなところに人が！？」

いままでたくさんの不幸な目に遭ってきた上条だが、ベランダに人が干されている、なんていうのは初めての経験だった。

故にこの状況に頭がついていかず、オロオロしていた。

が、そのとき。

ピクン、とその女の子の体が動いた。

そしてゆっくりと伏せていた顔を上条に向けて、そして――――

「おなか、へったんだよ……」

そう言った。

禁書目録編・第一話（後書き）

感想よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4965k/

とある魔術の禁書目録～幻想殺しと超電磁砲～

2010年11月14日10時29分発行